

ヨハネによる福音書12章20－50節 「光あるうちに」

1A 人の子の時 20－36

1B 一粒の麦 20－26

2B 再び現す栄光 27－34

3B しばらくの間の光 35－36

2A 信じるための呼びかけ 37－50

1B 信じることのできない者 37－43

2B 父と一つの方 44－50

本文

ヨハネによる福音書 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ヨハネ 12 章 19 節まで来ました。今朝は 12 章の後半、20 節から一節ずつ見ていきたいと思えます。ヨハネによる福音書はここで大きな分岐点を迎えます。イエス様は世に対して、ご自分こそが世の光であるとして証しされました。その外に対する働きは、いつまでも続くわけではなく、闇が来るのだよという警告をしておられます。13 章からは、すでに世から選び出されたご自分のものとなった弟子たちに語りかける内容となっています。

今日の説教の題名を「光あるうちに」としました、12 章 36 節から取っています。また、これは三浦綾子さんの道ありきの三部作の、第三部の題名にもなっています。そこに、罪とは、愛とは、髪とは、死とは何なのか、信仰に導くための入門書になっています。

私は、30 年前、大学一年生から二年生になる時の春休みに教会には通い始めました。その時、「道ありき」「この土の器をも」を読み、それから「光あるうちに」を読みました。二年生に進学する前の最後の日曜日、学期が始まればサークルも再開し、日曜日は必ず活動があったので、礼拝には行けないと思っていました。この時に、自分の人生を何とかしないといけない、遅すぎないうちにという思いがあって、「光あるうちに」の中身を見て、はっきりと自分の罪のために死なれたキリストがおられ、三日目によみがえられたことを知りました。そして、その礼拝で、イエス様を信じ受け入れるかどうかの招きがあった時に前に行き、信仰告白をしました。いつまでも光があるわけではありません、光あるうちに光のところに來る必要があるのです。

1A 人の子の時 20－36

1B 一粒の麦 20－26

20 さて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。21 この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。22 ピリポは行ってアンデレに話し、アンデレとピリポは行って、イエスに話し

た。

イエス様は、エルサレムにろばの子に乗って入城されました。ユダヤ人の群衆が、「ホサナ！」と叫びながら、イエス様を迎え入れました。この時は、過越の祭りです。世界中からユダヤ人がエルサレムで祭りを祝うためにやってきています。その中で、なんとギリシア人が何人かいたのです。彼らは、ユダヤ教に改宗したギリシア人であろうと考えられます。そして、彼らがイエスにお目にかかりたいことを、まずピリポに話しています。神殿の敷地は、外庭に当たる「異邦人の庭」というところがあります。そこから神殿の敷地には入れません、殺されても責任は取りませんという内容の標識さえあったほどです。ですからおそらく、イエス様が内庭のほうにおられて、中に入れないギリシア人が、自分たちのほうにイエス様がいらして、会ってほしいと願っているのだと思います。

そしてギリシア人は、十二弟子の中で自分が一番近づきやすい人を選んだのだと思います。「ガリラヤのベツサイダ出身のピリポ」のところに行きました。ピリポは、ユダヤ人でありながらギリシア語の名前を持っていました。アンデレもギリシア語の名前です。ギリシアの王アレクサンドロスの父もピリポという名前です。そこからピリポというマケドニアの町があります。そして、ベツサイダはデカポリスに近く、異邦人との行き交いも多かった町です。ピリポが、ギリシア語を話すユダヤ人であった可能性が高いです。そして同じくギリシア語の名前を持つアンデレにピリポが話し、二人がイエス様に伝えます。使徒の働きでは、異邦人への宣教でギリシア系のユダヤ人が用いられたのを見ますが、その始まりのような意味合いがあるでしょう。

23 すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。」

イエス様が、ついに「栄光を受ける時が来ました」と言われました。これは、イエス様がこの世に来られた理由、人の罪のために犠牲となって死なれる時であります。そして、三日目によみがえり、天に昇られる時であります。このことによって、確かにイエス様がキリストであり、神の子であることが明らかにされるのです。ヨハネの福音書を辿れば、イエス様が「わたしの時はまだ来ていない」と言い続けたことを知ります。カナの婚礼で、母マリアが、「ぶどう酒がありません。」と言った時に、「2:4 女の方、あなたはわたしと何の関係がありますか。わたしの時はまだ来ていません。」と言われました。仮庵の祭りの時、肉の兄弟たちが、エルサレムに行ってあなたのしている働きを見せなさいと言った時に、「7:6 わたしの時はまだ来ていません。しかし、あなたがたの時はいつでも用意ができています。」と言われました。エルサレムでは、ユダヤ人がイエス様を捕えようとしたが、「7:30 だれもイエスに手をかける者はいなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。」とあります。しかし今、ついに「栄光を受ける時が来ました。」と言われます。

前回、イエス様がエルサレムにろばの子に乗って入ってこられたところを読みました。イエス様は以前、ガリラヤ湖畔で、五千人のパンの奇跡によって、人々がご自身を王として祭り上げようとした時に、退かれました。ご自身がキリストとして、ユダヤ人の王としてご自身を現わす絶好の時だ

ったのに、むしろそれを牽制し、避けられたのです。しかし、エルサレムに今回、入られた時は何も妨げることなく、そのまま彼らの歓迎を受けられたのです。それは、時が来たからに他なりません。しかし、それは「拒まれる」時でもあります。「ダニ 9:26 油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。」公にキリストとして来られ、そしてキリストとして断たれます。

ところで、イエス様が、ギリシア人がご自身に会いたいと言われたその直後に、この言葉を発せられたのには、大きな意味があります。ユダヤ人しか神の宮の中に入ることができず、異邦人はユダヤ教に改宗しないかぎり、神の国に入ることはできないとされていました。モーセの律法を守ることによって、ユダヤ人と同じ祝福を受け、神の国の中に入ります。ですから、律法が隔ての壁となり、ユダヤ人と異邦人を分けていたのです。しかし、キリストが罪のために死なれることにより、その流された血によって、心が清められ、その新しくされた霊によって、異邦人も神に直接、近づくことができるようにされたのです。キリストが平和となってくださり、ユダヤ人と異邦人がご自身にあって一つとしてくださり、一つのからだとしてくださいました(エペソ 2:11-19)。ですから、イエス様は、神の民であるイスラエルのみならず、それ以外の人々にも神の救いが及ぶことを予期して、今こそ、人の子が栄光を受ける時が来たと感じましたのであろうと思われれます。

24 まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。

「まことに、まことに」は、「アーメン、アーメン」と言われています。真理を伝えたいという情熱です。そして、麦が種となって実を結ぶためには、麦の粒として残ってはならない、土の中で胚芽して、粒として残ってはならないとしています。それを死ななければならぬと表現しています。イエス様が死なれて、初めて多くの人々が永遠のいのちを得ることができます。この方がその時、生きる決断をされたら、イエス様は生かされるでしょうが、他の人々は罪の中で死んでいます。

25 自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。

イエス様が死なれることによって、多くの人に命を与えたように、イエス様に付いていく者も同じ姿勢でなければいけないということです。ここでの、愛する、憎むというのは、優先順位のことを示しています。イエス様に従うゆえに、自分のいのちを憎むというのは、命よりも先にイエス様を選び取ることです。自分は生きたいと思うからです。しかし、それでもイエスについていきますとして、この方を拒まない時に、つまり忠誠の話をしています。その行き着くところは永遠の命であります。

ところで、イエス様に従うため、命を捨て、それで多くの人々が主を信じ、救われたという証しは数多くあります。例えば、首狩り族だったガロ族、インドにいる部族ですが、今はほとんどがクリスチャンです。イギリスの宣教師によって福音が伝えられ、ある男性が救われ、家族も信じました。彼

は周りの人々にこの喜びを伝えていましたが、酋長は怒り、彼に信仰を捨てろと迫ります。「イエス様についていくことをもう決めています。」と言いました。すると彼の目の前で子供を酋長が殺しました。しかし、「誰も私といっしょにイエス様についていなくても、私は従います。」酋長は妻を彼の前で殺しました。「世は、私は捨てました。十字架だけが私の前にあります。」と答えます、それで本人を殺しました。この光景をすべて見ていた村の人々は、イエス様を信じ、ついに酋長自身もイエス様を信じたのです。主のゆえに死んだからこそ、今の命があります。

26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることとなります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

当時、ラビと弟子の関係は、ただ教えを受けるだけでなく、共にいるということが大事でした。またラビに倣うことも大事です。ですから、イエス様に仕えるというならば、イエス様の行かれるところについていきます。そのようにして、父なる神にも目を留めていただくことができます。ユダヤ人たちの多くが、イエス様をキリストとして、王として迎え入れたのですが、そこには自分が心の王座に着いたままでたたえていたのです。しかし、まことの主とするならば、自分を否み、自分の十字架を負い、それについていくのです。

2B 再び現す栄光 27-34

27 「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。28a 父よ、御名の栄光を現してください。」

イエス様は、矛盾したことを語っておられます。「この時からわたしをお救いください」と言われています。しかし、「いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」と言われます。この時とは、苦しみの時です。私たちの罪をご自身が背負われる時です。その罪のゆえ、イエス様は永遠の昔から父のふところにおられたのに、見捨てられてしまわれるのです。「神よ、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」と十字架の上で言われましたが、その苦しみです。それから救ってくださいと言われたのです。しかし、いや、その身代わりに死に、ご自身が罪人と数えられることこそが、父の御心なのだということです。十字架への道は、暗闇の力が覆う時です。人々の罪が噴出する時です。どうか、これを過ぎ去らせてくださいと祈るのは、ごく自然のことです。しかし、そこに神の御手があると信じて、受け入れられました。

私たちも、苦しみや悲劇が自分に襲いかかれば、それが過ぎ去ってほしいと願います。その時に、どうしてもやるせない気持ちになります。どうしてなのか？と心に疑いも生まれます。しかし、イエス様がどうされたのかを思い出しましょう。まず、祈られました。「父よ、この時からわたしをお救いください」と祈られました。ゲッセマネの園でも、杯を過ぎ去らせてくださいと三度も祈られました。同じように、私たちの苦しみと嘆きを主は聞いてくださいます(I ペテ 4:7)。そして、イエス様はよく考

えられました。「いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ」。私たちも、自分の心に問いかけるといいです。いや、この苦しきはたしかに神の目的があるのだと。

そして、神にお任せします。「父よ、御名の栄光を現してください。」と言われました。この苦しみの中で、神の栄光をあらわしてくださいと祈るのです。信仰をもって約一年後、自分の抑うつ症状はまだ直っていませんでした。けれども、「主よ、このままでいいです。ちり芥のような存在ですから。ただ、その中であなたの栄光が現れるように。」そうしたら、治ったのです！主よ、あなたのなさりたいことを、なさってくださいと任せると、そこに平安が来ます。「イザ 26:3 志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。」

28b すると、天から声が聞こえた。「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」

父が答えられました。イエス様がバプテスマを受けられた時に、そこで天からの声を聞かせ、高い山に弟子三人と登られたとき、そこで父が語られました。天からの声は、これで三回目です。神がここで、「わたしはすでに栄光を現した」と言われたのは、イエス様が行われた一連のしるしです。カナで水をぶどう酒に変えた奇跡から始まって、王室の役人の息子のいやし、ベテスダの池の男を立ち上がらせる、五千人の給食、生まれつきの盲人の目を開ける、そしてラザロのよみがえり、です。これらのことによって、神はイエスにご自分の栄光を現されました。そして、十字架、復活、昇天においてもお見せする、ということです。

29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、「雷が鳴ったのだ」と言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話しかけたのだ」と言った。30 イエスは答えられた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためです。」

シナイの山にて、主が天から声を出し、雷も伴いましたが、ここでも似たような現象です。だから雷が鳴った、そして御使いが語ったのだと評論しています。イエス様は、彼らがこのことによってご自身を信じるようにするため、声が聞こえるようにされたのだと言われています。

31 今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。32 わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」33 これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。

イエス様は、ご自身が十字架の上で死なれるということ、また、よみがえられることによって、悪魔に対して決定打が加えられることを語っておられます。「創 3:15 わたしは敵意を、おまえと女の間、おまえの子孫と女の子孫の間に置く。彼はおまえの頭を打ち、おまえは彼のかかとを打つ。」彼のかかとを打つというのは、悪魔がイエス様にかみつくといいことであり、闇の力によってイスカリオテのユダがイエス様を裏切るようにさせ、ユダヤ人指導者らのねたみを刺激して、ポンテオ・

ピラトの前で煽って、群衆に十字架に付けろと叫ばせ、これらの背後に悪魔がいました。しかし、それはかかとを打つぐらいのことでしかなく、実はそれによって、罪と死の束縛の中に生きている者たちを解放する、罪のための供え物になっていたということです。悪魔の仕業に、決定的な打撃を加えた、あたまを打ったのです。「ヘブル 2:14-15 そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」

そして、「地上から上げられる」という言葉、イエス様は十字架に付けられるという意味で使われました。ここからは、天に昇られるという意味かな？と一瞬、思うのですが、はっきりと十字架の木にかけられることを意味します。そして、このことによって、「わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます」と言われます。ご自分のもとに、ユダヤ人だけでなく異邦人も含めて、「すべて」引き寄せるのです。

34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは律法によって、キリストはいつまでも生きる聞きましたが、あなたはどうして、人の子は上げられなければならないと言われるのですか。その人の子とはだれですか。」

キリストはいつまでも生きるというのは、旧約聖書に出てくる約束です。「Ⅱサム 7:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」とこしえまでも堅く立てるとあります。(その他、詩 110:4、イザヤ 9:7 など)ところが、どうして上げられなければならない、十字架につけられなければならない、というのですか？と尋ねています。だったら、その人の子とは誰なのか？私たちが知っているキリストとは違うようだが？ということです。けれども、同じ旧約聖書で、キリストが死ななければならないことも多く語られています。

3B しばらくの間の光 35-36

35 そこで、イエスは彼らに言われた。「もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。36 自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」イエスは、これらのことを話すと、立ち去って彼らから身を隠された。

イエス様は彼らの質問に答えておられません。なぜなら、すでに彼らはイエス様が誰であるかを、さまざまなしるしによって知っているはずだからです。たった今も、天からの声を聞いて、それで神からの方だと分かったのです。けれども、十字架のことを少しでも言及すると、「ああ、この人は信じられない」として、躓いてしまいます。「Ⅰコリ 1:22-24 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、

召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。」

イエス様、今、光のあるうちに歩きなさいと呼びかけておられます。主ご自身が世の光です。そして、そこにある証しを与えられているうちに受け入れなさいと言われます。彼らの問題は、知的に理解できないということではありませんでした。自分たちの解放は、政治的、軍事的にやってくると信じていたことでした。私たちも、苦しみが来れば、試練が来れば、それが除かれることが救いであり、救い主とは状況からの救いだと思ってしまうでしょう。しかし、本当の神の力は、私たちのうちにある罪を取り除くところに現れるのです。そして、そこに、光があります。しかし、それは自分の闇を見ることになります。自分が罪の中にいることが分かります。しかし、光を信じれば、その罪は全て赦され、清められます。しかし、その福音から離れれば、迷宮入りします。どこに行けば分からなくなります。そして、暗闇を歩いたら崖から落ちてしまうのと同じように、滅びに至るのです。

そして、「立ち去って彼らから身を隠された」とあります。これは、最後のメッセージなることを意味しています。それ以上、語るべきことばはない、あとはあなたが光の中を歩む決断ができるかどうかなのだ、ということです。

2A 信じるための呼びかけ 37-50

そこで 37 節から著者ヨハネが、これまでのイエス様の宣教活動のまとめを行っています。

1B 信じることのできない者 37-43

37 イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。
38 それは、預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼はこう言っている。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。」39 イザヤはまた次のように言っているのだから、彼らは信じることができなかつたのである。40 「主は彼らの目を見えないようにされた。また、彼らの心を頑なにされた。彼らがその目で見ること、心で理解することも、立ち返ることもないように。そして、わたしが彼らを癒やすこともないように。」

ここには、人の選択と神の主権について明確に説明しているところです。まず、「イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。」とあります。しるしを見たのに、神の栄光についての光が与えられたのに、それでも信じませんでした。ヨハネが引用したイザヤ書は 53 章です、ユダヤ人にとっては「主の御腕」と言えば、エジプトから力強くイスラエルを連れ出した御腕を思い出させます。しかし、まさか御腕が、悲しみの人、病を知っていた人に現れるとは思っていませんでした。その言葉に続く言葉はこうです。「53:3 彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」

そして、次にヨハネは「信じるができなかつたのである」と言っています。信じなかつたのでは

なく、信じるができなかった、と言っているのです。何度となく、イエス様の証しを見て、聞いていたのに、それを拒みました。神ご自身がその拒絶をも用いて、ご自分の栄光を現すことにされたのです。40節は、イザヤ6章からの引用で、イザヤがこれから遣わされる時に、イスラエルの人々の心の状態を、神が前もって知らせた箇所です。

似たような話を思い出せませんか？エジプトのファラオです。彼は主から遣わされたモーセのことばを、強情になって聞き入れませんでした。災いが進むにつれて、「主がファラオの心をかたくなにされた。」という表現が出てきます。それでも、主は憐れみを示して、彼がへりくだることができるようにされていたのですが、それでも拒みました。神はその拒否する態度そのものも用いて、ご自分の栄光を現されたのです。しかし、本人は悲惨です、神の怒りの器になってしまいました。

イエス様が、悪霊を追い出されている時に、パリサイ人たちが、「マタイ 13:24 この人が悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ。」と言いました。それでイエス様が、「12:32 また、人の子に逆らうことばを口にする者でも赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、この世でも次に来る世でも赦されません。」聖霊によって、イエス様がはっきりとメシアご自身なのだということが証しされていました。その聖霊の証しを拒むのであれば、罪の赦しのためにこられた方を拒むことに外ならず、永遠に赦されることがないということです。

主は憐み深い方です。すべての人が悔い改めて、一人でも滅びてほしくないと願われています。しかし、神は強制させることのない方ですから、何度も罪の赦しを拒む中で、その拒む態度をそのままに捨て置かれることがあるのだということです。

41 イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語ったのである。

これは、実に興味深いことです。私たちは、旧約は旧約、新約聖書にイエス様が現れると思いがちです。イザヤ書 6 章にて、主が遣わすイザヤに語られた時、天における神の御座の幻がありました。「6:1-3 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高く上げられた御座に着いておられる主を見た。その裾は神殿に満ち、セラフィムがその上の方に立っていた。彼らにはそれぞれ六つの翼があり、二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでいて、互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満ちる。」これは、イエスの栄光であった、つまりイザヤの見た、御座に着いておられる方は、イエスご自身であったということです。

ところで、ヨハネはイザヤ書 53 章と 6 章のそれぞれから、これはイザヤが語ったことだと言いました。これから当たり前のことを話します。どちらも、イザヤが預言しました。こういった話があるのです。「学問的見識では、イザヤ書は 1 章から 40 章までと、41 章から 66 章では異なるイザヤが書いている。」第一イザヤ、第二イザヤなどというものがあり、第三イザヤとかいう人たちまでがいます。ひとえに、イザヤが預言していたことが、見事にその通りになったからです。キュロス王の名

前が、彼の誕生する 100 年も前に出てくるのですから、「これは、起こってからでない」と説明がつかない」となってしまうのです。聖書は、永遠の神を証している書物です。初めから終わりの日について告げる書物です。

42 しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかった。43 彼らは、神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛したのである。

以前、生まれつき盲人が目の開かれた後に、ユダヤ人議会に彼の両親が連れてこられました。彼らは明確に証言しませんでした、なぜなら、「9:22 すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。」とのことです。これは、ユダヤ人の共同体から破門されるということ、村八分にされることを意味しています。ここでも同じです、パリサイ人の目が気になるので、議員の中にイエス様を信じて、公表しなかったのです。

これは、私たちに對する靈的な挑戦です。心では信じて、公に口に出すことを控えます。なぜなら、自分の属している共同体から追放されるからです。イエス様のくださる永遠のいのちよりも、イエス様との関係よりも、共同体から外される恐れが増しているのです。これは、神ではなく、人の栄誉を愛しているということです。日本では、数多くの方が、「自分は仏教があるから、クリスチャンになることはできない」と言います。では、仏の道を本当に信じているのか？というところではないですね。家が浄土真宗だから、とかいうものがほとんどでしょう。人の目を気にすること、これがまことの信仰から引き離すのです。イエス様を人の前でも認めているでしょうか？ご自身をクリスチャンであることを、近くの人に、知人に友人に明かしているでしょうか？

2B 父と一つの方 44-50

ヨハネは最後の最後、世に対するイエス様の呼びかけを次のように掲載します。

44 イエスは大きな声でこう言われた。「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を信じるのです。45 また、わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのです。

イエス様はへりだり、またご自身と父との関係と使命を話しておられます。ご自身ではなく、父なる神を信じることなのだということ。イエス様は父と一つになっておられます。

46 わたしは光として世にきました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。

罪と不義の闇の中に留まることなく、世から救われるために、光の子となるように、イエスを信じなさいということです。

47 だれか、わたしのことばを聞いてそれを守らない者がいても、わたしはその人をさばきません。わたしが来たのは世をさばくためではなく、世を救うためだからです。48 わたしを拒み、わたしのことばを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます。

ここには大事な違いがあります。主の言葉を聞いてそれを守らないということがあり得ます。ペテロは例えば、イエス様を三度、知らないと言いました。主は、人の前で知らないと言ったら、天において父の前で知らないと言われていたのです。だから、彼は最後の審判で裁かれ、火と硫黄の池に投げ込まれなければいけません。しかし、後に憐れみを受けています。そうです、主は来られたのは世を裁くためではなく、救うためだからです。キリストのうちにある者は、だれでも決して罪に裁かれることはないのです。けれども、主のことばはそもそも守れないとして、この方ご自身を拒み、みことばを受け入れもしなければ、その人は裁かれます。行いではなく、信仰によって義と認められるのです。

そして、「わたしが話したことば、それが、終わりの日にその人をさばきます。」というのも大事ですね。何か裁くというと、自分が少し悪いことをしたら、お仕置き！とばかりに、お尻をぺんぺん叩くような、閻魔様みたいな、そういった罰のように考えてしまいます。そうではありません、自分が拒み、自分が受け入れていないだけで、イエス様は何一つ変えていないのです。イエス様を拒むのであれば、そこにある神の憐れみを拒んでいるのですから、憐れみのない状態がその人に留まるだけなのです。

温度というのは、熱があるかないかであることが知られています。寒いというのは、寒さが与えられるのではなく、ただ熱が少ないというだけです。熱が多いと暑い、熱が少ないと寒いのです。光も同じですね、闇というのは、光がないだけです。それと同じで、神の裁きというのは、憐れみと慈しみに富む神がおられないということです。もちろん、神は遍在、遍く存在する方ですから、存在としてはもちろん地獄にもおられますが、神のご性質の実体をもっておられるというのがなくなります。イエス様は、ご自身にこそ命があるとされました。だから、終わりの日に、いのちのない状態が与えられることによって、それが裁きなのです。

49 わたしは自分から話したのではなく、わたしを遣わされた父ご自身が、言うべきこと、話すべきことを、わたしにお命じになったのだからです。50 わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。ですから、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのまま話しているのです。」

主は父なる神と一つですから、語られる言葉も父の言葉そのものでした。そして、ご自身を信じて永遠のいのちを得ること、それが父から子に与えられた命令でした。この中で、イエス様を信じていない方がおられるのであれば、光あるうちに、ぜひ光の中を歩む一歩を踏み出してください。